

博士論文要旨

理学療法士養成施設におけるコンピテンシー基盤型教育の導入

ーコンピテンシーの設定から評価方法の試案とフィードバック方法の開発と運用についてー

山崎 尚樹

現在、リハビリテーション関連職教育の課題として、養成校の増加や医療技術の高度化に伴う、理学療法士への専門性・多様性に富む社会的ニーズなどがある。このような社会的背景の中、理学療法士作業療法士養成施設指定規則が2018年に改正され、2020年度より施行された。指定規則の変更に伴い、理学療法学教育に求められるものは、理学療法士の質を意識し、理学療法卒前到達目標が専任教員・実習指導者・学生の3者で共有できる教育システムの確立と到達目標から開発された評価尺度の運用であるといえる。これらを可能にする教育システムとして、コンピテンシー基盤型教育がある。このコンピテンシー基盤型教育を導入するにあたり、①コンピテンシーの設定、②コンピテンシー修得度の評価方法の確立、③コンピテンシー修得状況に対するフィードバックの実施が必要であるとされている。そこで本研究は、理学療法士養成施設においてコンピテンシー基盤型教育を導入し、その実用性・有用性を検証するべく、①理学療法士養成施設の学生を対象にしたコンピテンシーの設定とコンピテンシー評価尺度の試案作成、②理学療法士養成施設の学生を対象にしたコンピテンシー評価尺度の運用と修得状況の経時的変化の確認、③理学療法士養成施設の学生を対象にしたコンピテンシー修得に対するフィードバック方法の開発の3つの目的で実施した。尚、本研究の有意水準は5%未満とした。

まず、コンピテンシー基盤型教育の導入として、理学療法士養成施設学生のコンピテンシー項目の抽出と理学療法士養成施設学生のコンピテンシー評価尺度の試案を作成した。コンピテンシーは、C専門学校理学療法学科専任教員9名と臨床実習施設責任者12名で構成されるワーキングチームでデルファイ法を用いて、コンピテンシー項目の抽出を行い、7カテゴリー57項目が抽出された。次に、抽出したコンピテンシーをもとに、理学療法士養成施設学生のコンピテンシー評価尺度の試案を作成し、尺度の信頼性・妥当性を検証した。因子分析の結果、①理学療法実践能力、②自己管理・自己教育力、③社会的能力、④理学療法基礎知識の4因子が抽出された。

抽出されたコンピテンシーをカリキュラムに反映し、コンピテンシー基盤型教育の導入を実現するために、科目特性に合わせて科目ごとのコンピテンシー達成レベルの設定と、年次ごとに卒業目標マトリックスを設定した。また、科目間の繋がりや科目ごとのコンピテンシーの包含状況を表した、カリキュラムツリーを作成した。さらに、試案作成した評価尺度から明らかになる、コンピテンシー修得状況をフィードバックする方法として、「コンピテンシー修得状況フィードバックシート」を開発した。

試案作成したコンピテンシー評価尺度の運用を行うために、既存評価である「客観的臨床能力試験」の結果との相関を確認した。その結果、客観的臨床能力試験とコンピテンシー尺度の「自己管理・自己教育力」($r=0.27$)と「社会的能力」($r=0.30$)との間で相関関係が確認された。また、実習体験によりコンピテンシーの修得状況がどのように変化するかを確認するために、実習前後でのコンピテンシー評価尺度の変化を確認した。まず、評価実習の体験前後での比較では、「社会的能力」の項目で有意な差が確認された。また、合計得点および因子別得点の平均値は、評価実習前と比較して評価実習後の方が全項目で低値を示した。次に、評価実習から総合臨床実習にわたる全実習期間でのコンピテンシーの修得状況の経時的変化は、有意な変化が確認された。カテゴリーごとの群間比較においても、全ての群間で有意な差が確認された。カテゴリーごとの平均値の比較は、全てのカテゴリーにおいて実習回数を重ねるごとに高い値となった。また、カテゴリー間の比較では、④理学療法基礎知識<①理学療法実践能力<②自己管理・自己教育力<③社会的能力の順で高い値となった。

理学療法教育におけるカリキュラは、実習のみで構成されるわけではなく、学内教育の構成割合も大きい。そこで、年次の進行によるコンピテンシー評価尺度の経時的変化を検証し、学内教育におけるコンピテンシーの修得状況を確認した。その結果、コンピテンシー評価尺度の1年次後期終了時点と2年次後期終了時点の前後比較の結果では、全項目で有意な差が確認された。得点率の平均値の比較では、全項目で2年次後期終了時点の方が高い値となった。また、各項目の変化率は、③社会的能力<②自己管理・自己教育力<④理学療法基礎知識<①理学療法実践能力の順で高い値となった。

コンピテンシー修得状況をフィードバックする方法として開発したフィードバックシートを運用する中で、フィードバックとしての働きを成しているのかを確認するために、フィードバックシートが学生にどのように受け止められているかを調査した。その結果、アンケートの全項目で8割を超える肯定的意見が得られ、フィードバックシートが学生に肯定的に受け入れられていると示唆された。さらに、フィードバックシートが学習に対してどのような影響を与えているのかを学生に対するインタビューをもとに確認した。その結果、フィードバックシートの実施により、学習意欲や学習に臨む姿勢に変化が起き、成績向上に繋がったという回答が全対象者から得られた。

学内教育において、コンピテンシーの修得をより高める学習技法として、先行研究の結果から協働学習が挙げられた。そこで、協働学習の実践により、コンピテンシー修得状況がどのように変化するの
かを確認した。まず、理学療法教育における協働学習の有効性を確認するために、ジグソー学習と学
習技法を支持しない学習との学習技法の違いによる学習効果の違いを検討した。その結果、多肢選択
式試験では、学習技法の違いで有意な差はみられなかった。目標志向測度では、ジグソー学習におい
て学習前後で競争志向のみ有意な差がみられた。次に、協働学習を実践しコンピテンシーの修得度へ
の効果を確認した。その結果、コンピテンシー評価尺度の合計得点は、協働学習前後で有意な差は確
認されなかった。しかし、協働学習の特徴から「協調性」や「情報力」に関連するコンピテンシーの
修得には、効果的であることが示唆された。

最後に、本研究は、一養成施設内でコンピテンシー基盤型教育を導入・実践した結果である。このこ
とは、研究結果の汎用性に欠けているといえる。したがって、今後は、他の理学療法士養成施設での
運用の検討をしていきたい。